

Production Note [制作ノート] 1949-1972



山田正亮はその画業の前半に、56冊の制作ノートを残しました。制作しつつある作品をノートにも丹念に描き込み、仕事の進みゆきや課題についてその横に書きつけています。「絵画との契約」「全色彩は絵をみつめる」などの独特な言葉もそこに頻出。ときとして身辺雑記、自身が見たいいろいろの展覧会のこと、恋愛話、戦争の苦しい記憶、画家として認められないジレンマなどなど、山田の困難な挑戦を彷彿とさせる記述が満載です。ただし、彼の字を読み取るのは一苦勞。(カタログにはノートの一部の画像が、読み下しとともに掲載されています。)

Work D 1970-1979



1970年代山田正亮の作品は、グレーに近づいた微妙な色調を用い、グリッド（格子）状に画面を仕切って塗り分けるスタイルによって描かれています。筆触はほとんど消され、1960年代までの画面にあった下層の絵の具の盛り上がりがつくる凹凸も見られなくなったこともあって、色彩の面が雲のようにふわっと漂う、まるでライトボックスのような感覚がひき起こされます。そのさり気なさや硬質さは、どこか1970年代の時代の空気を彷彿とさせないでしょうか。

Work D.3 1970 油彩・キャンバス 97×97cm	Work D.112 1972 油彩・キャンバス 130×43cm	Work D.p 206 1974 コンテ・紙 79×49cm	Work D.230 1976 油彩・キャンバス 162×130c	Work D.294 1978 油彩・キャンバス 80.5×60.8cm
Work D.44 1970 油彩・キャンバス 91×80.3cm	Work D.114 1972 油彩・キャンバス 130×43cm	Work D.p 226 1974 色鉛筆・紙 72×90cm	Work D.231 1976 油彩・キャンバス 116.8×91cm	Work D.296 1978 油彩・キャンバス 80.5×61cm
Work D.87 1972 油彩・キャンバス 227.3×162cm 国立国際美術館	Work D.116 1972 油彩・キャンバス 130×43cm	Work D.184 1975 油彩・キャンバス 80.3×116.8cm	Work D.234 1976 油彩・キャンバス 89.5×130.2cm	Work D.297 1978 油彩・キャンバス 194×194cm 高松市美術館
Work D.92 1972 油彩・キャンバス 227.2×162cm 名古屋市美術館	Work D.119 1972 油彩・キャンバス 130×43cm	Work D.186 1975 油彩・キャンバス 80.3×116.8cm	Work D.253 1976-77 油彩・キャンバス 72.8×53cm	Work D.301 1978 油彩・キャンバス 116.7×80.3cm
Work D.100 1972 油彩・キャンバス 227.3×162cm 高松市美術館	Work D.142 1973 油彩・キャンバス 60×162cm	Work D.210 1975 油彩・キャンバス 194×194cm	Work D.259 1977 油彩・キャンバス 130.3×89.5cm	Work D.315 1979 油彩・キャンバス 72.8×53cm
Work D.109 1972 油彩・キャンバス 130×43cm	Work D.144 1973 油彩・キャンバス 60×194cm	Work D.p 248 1975 色鉛筆・紙 77×50cm	Work D.262 1977 油彩・キャンバス 182×182cm	Work D.321 1979 油彩・キャンバス 194×130cm 福島県立美術館
Work D.111 1972 油彩・キャンバス 130×43cm	Work D.163 1974 油彩・キャンバス 194×130cm	Work D.p 263 1975 コンテ・紙 74.5×105cm 千葉市美術館	Work D.264 1977-78 油彩・キャンバス 194×194cm	Work D.325 1979 油彩・キャンバス 194×130cm 福島県立美術館
	Work D.170 1974 油彩・キャンバス 194×130cm 府中市美術館	Work D.p 264 1975 コンテ・紙 74.5×105cm 府中市美術館	Work D.277 1977-78 油彩・キャンバス 162×112cm 府中市美術館	

● 画家のアトリエから



人並み外れて几帳面な整理魔山田正亮の画室は常にきれいに整理されていました。ただしかれは実際に作品を描いている様子を、近い人にとすら見せることはありませんでした。ここでは、絵の具や筆のラック、白く塗った脚立、壁に立てかけられた作品を通して、制作の現場をちょっとだけ覗き見。ここに限って撮影OKです。

Work E, Work F 1980-1995



1978年山田正亮は、東京銀座の康画廊での大規模な個展で、一躍、時の人といえるくらいに注目を浴びました。描きはじめてから40年後のことです。そのころからかれのスタイルは、また大きく変わります。色面は、筆のストロークを強調した、動きを感じさせるものにとってかわられ、かなり大型のキャンバスが使われるようになります。徹底的に抑制をきかせてきたそれまでの画面と比べると、自由で開放的な表現に向かったといえるでしょう。その気になれば、線や色斑を人間や樹木の姿に見立てることさえできます。ただし、依然としてどの作品も、十字形や長方形、水直線や水平線が、骨格のように絵画を取り仕切っているのがわかるでしょう。

Work E.p 105 1980 コンテ・紙 72×90cm 千葉市美術館	Work E.p 447 1984 水彩・紙 79×109cm	Work E.280 1987 油彩・キャンバス 259×388cm 国立国際美術館	Work F.20 1990 油彩・キャンバス 259×388cm 千葉市美術館	Work F.131 1992 油彩・キャンバス 182×259cm
Work E.151 1983 油彩・キャンバス 182×456cm 高松市美術館	Work E.p 526 1985 水彩・紙 72×90cm	Work E.p 666 1987 油彩、コンテ・紙 78.5×107cm	Work F.p 3 1990 コンテ・紙 78.5×107cm 色彩美術館	Work F.220 1994 油彩・キャンバス 227×364cm
Work E.p 324 1983 油彩、コンテ・紙 70×100cm 千葉市美術館	Work E.250 1986 油彩・キャンバス 東京国立近代美術館	Work E.p 803 1988 水彩・紙 72×90cm カザハラ画廊	Work F.116 1992 油彩・キャンバス 182×259cm	

作家略歴	
1929年	山田正亮（本名 正昭）は東京に生まれる。男4人女1人兄弟の末子。長兄と次兄は友禅染の絵師だった。
1943年	東京府国分寺町の陸軍兵器行政本部製図手養成所に入所。翌年、同養成所教務室助教となり、陸軍兵器行政本部委託生として、東京都小金井町の東京都立機械工業学校第二本科機械科に入学。
1945年	東京の自宅が空襲で焼失。避難先でも空襲にあう。終戦。陸軍兵器行政本部退職。
1949年	「日本アンデパンダン展」「自由美術展」に出品。(以後継続して出品。)
1950年代前半	結核を患い入退院を繰り返す。
1958年	教文館画廊で初個展、その後、養滑堂画廊、南天子画廊ほかで個展。
1978年	康画廊で個展。
2005年	府中市美術館で個展。
2005年	文化庁長官表彰を受ける。
2010年	胆管がんにより自宅にて死去。

作家略歴	
1929年	山田正亮（本名 正昭）は東京に生まれる。男4人女1人兄弟の末子。長兄と次兄は友禅染の絵師だった。
1943年	東京府国分寺町の陸軍兵器行政本部製図手養成所に入所。翌年、同養成所教務室助教となり、陸軍兵器行政本部委託生として、東京都小金井町の東京都立機械工業学校第二本科機械科に入学。
1945年	東京の自宅が空襲で焼失。避難先でも空襲にあう。終戦。陸軍兵器行政本部退職。
1949年	「日本アンデパンダン展」「自由美術展」に出品。(以後継続して出品。)
1950年代前半	結核を患い入退院を繰り返す。
1958年	教文館画廊で初個展、その後、養滑堂画廊、南天子画廊ほかで個展。
1978年	康画廊で個展。
2005年	府中市美術館で個展。
2005年	文化庁長官表彰を受ける。
2010年	胆管がんにより自宅にて死去。

展覧会カタログ：336ページ、作品や制作ノートの図版満載、エッセイ5本。大溝裕によるデザイン、日英バイリンガル。2700円+税。美術出版社刊行。一般書店やネット書店でもお求めいただけます。

endless 山田正亮の絵画

会場構成：西澤徹夫
会場ディスプレイ：東京スタジオ

会場グラフィック：大溝裕(Glanz)
照明：灯工舎

主催：東京国立近代美術館・京都国立近代美術館

協力：一般社団法人山田正亮の会、東芝ライテック株式会社、東芝エルティールエンジニアリング株式会社



平成28年度文化庁地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業

endless

山田正亮の絵画

会場ガイド

かいぶつ

画家山田正亮ワールドへようこそ！

絵画の饗宴を、是非お楽しみください。

山田正亮*(1929-2010)は、「絵画と契約」**した男です。その背景にあったのは、少年期の過酷な戦争体験。罪もない多くの人々の理不尽な死を目の当たりにした山田は、確かな価値を求め、なぜか絵を描くことにその身を託し、その後、半世紀以上にわたり、ひたすら描き続けました。かれにとって一枚一枚の作品の制作は、常に身を削るような真剣勝負。一見みな同じようなストライプに見えても、それぞれの作品はみな違った表情と個性を持ち、何層にも重ねられた絵の具が、とても豊かな視覚体験へと誘ってくれます。5,000点を超える山田の絵画***のなかから選りすぐられた219点を通して、今日にあっても衰えることのない絵画の力を、そして、描くいとなみの奥深さを実感していただければ幸いです。ただし、めまいにはご注意ください。

*読みは「まさあき」、ですが「せいりょう」ともよく呼ばれます。
** 山田正亮が残した制作ノートに記された言葉。
*** 山田正亮はすべての作品をナンバリングして台帳に記録しています。おそろしくまめな人でした。

「画家のアトリエから」のコーナーのみ写真撮影OKです。それ以外の場所での撮影はできません。

